

〔技術〕

## 作業科への傾斜

佐々木 享

「中間まとめ」の技術科の項をみて、まず目につくのは、「実践的学習」を強調していることである。技術科の学習は実習（生徒に作業をさせること）中心でなければならぬという文部省の主張を、「そう鮮明にしようとしている点に大きな特長がある、と  
いってよい。

ところで「中間まとめ」の技術科の項には、おどろいたことに、「実践的学習」の具体的ななにかみについて、ただのひとことの説明もない。なかみを推測する手がかりは、「目標について」の説明のなかに「生活に必要な基礎的技術に関する実践的学習を中心とする」のがこの教科の性格なのだと書かれている部分だけである（傍点は引用者、以下同じ）。このばあいに重要なのは、「基礎的」ということばでなく、「生活に必要な」という部分である。「生活に必要な技術を教えるのだ」という主張も、技術科誕生以来のものである。技術科教育を技術教育として位置づけるためには、「技術」とは生産技術のことなのだということをはっきりさせる必要があるはずである。「生活」ということばを広く解すれば「生産」もふくまれようが、こういう解釈は、従来もそうであったように、技術科の性格をあいまいなものにしてしまう。

（もっとも、「生活に必要な」ということばが入ってくるのは、じつは、この教科が「技術科」ではなく「技術・家庭科」であるからなのであろう。いずれにせよ、技術科を技術教育としてはゆがんだものとする要因であることにちがいはない。）

「中間まとめ」が、なかみも示さずに「実践的学習」を強調する意味をたしかめておく必要がある。（現行の栽培分野を除くか否かなど方針が決っていないから具体的に示さないのだ、という見解は、一理あるようにみえるがことの本質を見失わせるおそれがある。）ひとつの説明は、この教科は「社会科、理科、道徳などと有機的な関連をもつ」ことが強調されている点に求められる。今回の「中間まとめ」において、とりたてて「道徳」との関連が指摘されているのはこの技術科だけである（実質的には、国語、社会などを中心に全教科が深くかわっていることは当然！であるにしても）。よく知られているように、現在の技術科の系譜をたどっていくと、この教科の祖先（？）の一つには、もっぱら作業させることによって勤労精神の育成されることが期待されていた旧制中学校の作業科がある。また、今回の改訂作業の当面の責任者である石川中等教育課長が、「いまの職業の外に、勤労尊

重の精神を高め、職業の社会的役割や、社会連帯の実際についての認識を深めるため、**奉仕**とか、**勤労**とかの実習の時間を特別教育活動の中で設けたらどうかという意見が有力であります」(全日本中学校長会研究部長編『中学校教育課程改訂の諸問題』五一頁)とのべていることも指摘しておかなくてはならない。はじめに**作業科**を必修として課し、やがて**教科外**(現在の**特活**に当る)の「**修練**」となった戦前の経過をふりかえってみるとき、今回の改訂で必修教科たる**技術科**のなかに**勤労精神育成**のための「**実践的学習**」をもち込んできてもふしぎはない。この点をうらづけるのは、「各項目の取り扱いについては、地域や学校の実態および生徒の必要に即して、弾力的に指導できるよう」にせよという寛大(?)な配慮である。現行の**技術科**は、各学年・各分野ごとの時間数まで規定されており(小・中学校全教科のうち**技術科**だけ)、**実践的学習**の実習例(題材まで指定されている。われわれは、この配慮(?)をもってたんに拘束性がゆるくなると喜ぶおひとよしであってはなるまい。勤労精神育成のばである**実践的学習**は、**実習的学習**(作業であるかぎりには(文部省からみれば)何でもよい)のだから。作業科も、「**修練**」もまたそうであった。一九四七年の**職業科**以来(明治の**手工科**・**実業科**以来といっても同じ)、**性格**・**内容**とも変せんを重ね、いつも**不安定な教科**であるという伝統をもつ**技術科**は、**勤労精神育成**のばという**安住の地**を見出すつもりかもしれないが、そこは**作業科**と同様に**不安定なもの**のたらざるを得ない運命がまつている、**と**いっては過言だろうか。**具体的な内容が少しも示されていないにも拘らず、実践的学習**」の**学習形式**が、**特定の題材を中心としたいわゆるプロジェクト**

ト**学習**をいっそう**強化**されたことは、「**項目**については、**実践的**活動を**中核**とし、**ま**とまり**ある学習**ができるように**組織**すること」という指示に明らかである。実習中心主義の**いわゆる実践的学習**(プロジェクト法が、系統的に理論と知識を学習するために全く不適切であることは、われわれがくり返し主張してきたところである。今回の「**中間まとめ**」のように「**実践的学習**」が強調されてくると、従来一部**み**られたような、**プロジェクト学習**でも**原理原則**を教えること**できる**という**折衷主義**の弱点はいっそう明らかになるだろう。技術科で教える**内容**(理論と知識の統系性の探求と、その教授法の研究)と**つくむ**ことが**いっ**そう重要になってくるし、その**実践**こそが**勤労精神主義**への傾斜度合を強めようとする**技術科**を**す**う道であろう。

今回の「**中間まとめ**」が**全体**として**コース制強化**の方向を強めているが、この**技術・家庭科**では**男女の差別**が**いっ**そう**強化**される**こと**が意図されている**こと**も指摘しておかねばならない。この差別政策のもつ意味は、**実践的学習**の名のもとに**勤労精神育成**が**は**かられる**ば**あい、**いっ**そう**強烈**なものとなるだろう。

さいごに、「**中間まとめ**」は、**今**まで**注意**しなかった**こと**への**申しわけ**のように「**実習**における**安全**の保持について、**いっ**そう**留意**すること」とのべている。もともとこの**こと**は**文部省**へい**う**べき**こと**であるから、**われわれ**は「**注意せよ**」式の通達で**ごま**かされ**ない**よう**監視**を**強化**するとともに、**技術科**の**授業**における**半級学級**の**制度化**、**危険機械類**の**排除**、**教委**による**安全基準**の**遵守**などの**要求**実現のための**たたか**いを**ひろ**め、**強化**することが**必要**である。

△**教育科学研究会**・**技術教育部会**▽